第V章　妊産婦の心理についてのインタービューによる調査

研究第8部　牛　島　義　友
湯　川　礼　子

1. 目　的

母性意識の成立過程について昭和22年に牛島は妊産婦（140例）に面接による質問調査を行ない出産前後の子供に対する感情の変化をみた。当時は敗戦後の混沌とした社会状勢で生活の不安定や食料の不足が妊産婦に大きな影響を与えていたが、戦後最初のベビーブームの年でもあった。20数年後の平和な今日、さきの調査と同一の調査を行ない妊産婦の心理や態度の変化をみると共に、出産、育児をよりよい状態で行なうことができるよう問題点をさぐることがこの研究の目的である。

2. 方　法

昭和22年に行なった調査と同様の方法で行なう。即ち愛育病院利用の妊婦（100名）産婦（50名）に一人一人面接して下記の質問を行ない自由に回答してもらった。一人の面接所要時間は20分内外である。

(1) 質問項目

〔妊婦への質問〕

1) 氏名、年令、出産予定日、妊娠回数、学歴、職業、家族構成

2) 妊娠への期待

(1) 妊娠は当然だと思っていたか

(2) 妊娠は避けたいと思っていたか、その理由

3) 妊娠自覚期

(1) いつごろ妊娠に気づいたか

(2) その時の感情

(3) 妊娠による態度の変化

4) 妊娠中

(1) つわり及びつわり後の身体的異常

(2) 心理的異常の有無

(3) 母としての自覚の有無

(4) 胎　教

5) 出産の心構え

(1) 出産に臨む心

(2) 生まれる子供への期待

〔産婦への質問〕

1)〜5) 妊婦への質問と同じ

6) 出産後

(1) 出産前後の子供への感情の変化

(2) 子供の将来についての期待

(2) 調査対象

1) 妊婦　愛育病院産科外来へ定期受診のために来院の妊娠4か月から妊娠10か月の妊婦で初産・経産各50名、計100名に診察の待ち時間に面接質問を行なった。

2) 産婦　①愛育病院で出産し入院中の産婦27名正常分娩で母子共に健康で異常のない人を選び、出産後3日目の午前9時〜9時半の比較的寛いだ時間に病室でインタービューした。前回の調査では出産後1週間経過したものについて行なったが、今回は出産後3日目とした。その理由は1、2日目ではまだ出産の疲労がとれないし、4日目は退院の前日で退院後の指導が行なわれ、5日目は退院日なので3日目を選んだ。②愛育病院で出産し子供の第1回目の保健指導を受診に来た母親に診察を待つ間に面接質問した。この人たちは出産後約1か月を経過した人（23名）である。産婦は①の出産後3日目と②の出産後約1か月を経過した人の両群である。

調査は昭和45年1月から46年4月にかけて行ない、150例全員を湯川が面接質問した。

3. 結　果

質問はすべて自由回答であるが、前の調査にならって回答を分類し集計した。

一つ一つの項目につき前回の調査と比較しながら検討していくこととする。

先ず今回の調査と昭和22年に行なった調査の対象は共に愛育病院の利用者ではあるが階層が異れば自ずと考え方や態度が異るので同一の調査を行なっても、その結果をみて時代の変化を云々することはできない。そこで年齢、職業、学歴から二つの集団が同じような階層であるかをみることとする。

年齢は26歳から30歳までが半数を占めており同じような年齢層といえる。（第1表）

第1表　被調査者年齢

	昭和46年		昭和22年	
	妊婦	産婦	妊婦	産婦
～20歳			2	
21歳～25歳	19	8	25	10
26歳～30歳	54	29	48	12
31歳～35歳	23	11	15	10
36歳～40歳	3	2	8	3
41歳～	1		1	2
計	100	50	99	37

夫の職業についてみると第2表のように会社員が1位、次いで商業・自営業、技術者下（デザイナー、調理師、理容師、運転手など）が主なものであり、前回は会社員、公務員、商業・自営業、技術者上（電気技師、設計技師など）でほぼ似たような集団であるが前回の方がいくらか上流階級といってもよい。しかし前回の調査では無職が妊産婦合わせて8名いたが、今度の調査では無く、生活が安定しているとみることができる。

また妻が就職している人は全体の16％で職種は会社員、教員、編集者、放送ディレクター、美容師、店員などあり、女性の社会への進出をみせている。

第2表　職　　業

	夫の職業				妻の職業	
	昭和46年		昭和22年		昭和46年	
	妊婦	産婦	妊婦	産婦	妊婦	産婦
公務員	6	1	13	4		
会社員	60	30	45	16	4	1
教員・宗教家		1	4	2	1	1
医者	1	2	5	2		
技術者上		2	12	2	1	1
技術者下	12	3			2	2
芸能・出版・文化	3	1	2	5	1	1
商業・自営業	18	10	12	4	6	
その他					1	2
無職			6	2	84	42
計	100	50	99	37	100	50

妻の学歴は半数以上が短大、大学卒の高等教育を受けている。前回の調査では専門学校卒は14％程度であるから教育程度は高くなってきている。（第3表）

このように年齢、職業、学歴を通してみると、年齢においては学歴からみてもわかるように今回の方が年齢が少し高くなってはいるが26歳～30歳がピークとなっている点では同じである。夫の職業は前回の方が専門的職業が多かったが、ほぼ似たような傾向である。学歴についてみると教育程度はかなり高くなっているが、これは社会全般の傾向であるので特に変ったとはいえず今回と前回の調査の集団は大体同質といってよいと思う。

第3表　学　　歴

	昭和46年			昭和22年	
	妊婦	産婦		妊婦	産婦
中学校卒	8	2	小学校卒	20	6
高等学校卒	37	16	高等小学校卒	13	2
短期大学卒	26	11	女学校卒	52	25
大学卒	29	18	専門学校卒	14	4
無答		3			

1）妊娠は当然だと思っていたか

先ず妊娠に対する期待、即ち妊娠するのは当然だと思っていたかをきいてみると第4表のように60％の人は妊娠するのを当然のこととして受けとめている。しかし30％は意外なことと感じている。前回の調査と比較してみると妊娠は当然だと思った人は69％でほぼ同数だが、いいえと答えているものは少数であった。またどちらともいえないというのは前回21％であったのが今度は9％に減っている。これはこのような個人的な質問に対してもはっきり意志表示をするようになったためとも考えられるし、最近は受胎調節の知識が非常に普及したので計画的な出産を行なっている人が多いためと思われる。妊娠は意外だったと答えた人の中には「長い間子どもが出来なかったので」、「体が弱いのでできにくいといわれていた」という人もいくらかあるが、「一応受胎調節をしていたので予想外だった」「子どもは一人でよいと思っていたので思いがけない」「注意していたが、上の子に母乳を与えていたので生理がなく油断してしまった」というように計画出産を何らかの方法で実行している。妊娠は当然だとした人の中にもこの考えは、うかがうことができる。即ち「どうしても10月にほしいと思い計画してい

第4表　妊娠は当然だと思っていたか

	昭和46年					昭和22年				
	初産婦		経産婦		計	初産婦		経産婦		計
	実数	%	実数	%	%	実数	%	実数	%	%
はい	31	62.0	29	58.0	60	34	75.6	35	63.6	69
いいえ	12	24.0	19	38.0	31	3	6.7	7	12.7	10
無答	7	14.0	2	4.0	9	8	17.8	13	23.6	21
計	50	100.0	50	100.0	100	45	100.0	55	100.0	100

第5表　妊娠は避けたいと思っていたか

	昭和46年					昭和22年				
	初産婦		経産婦		計	初産婦		経産婦		計
	実数	%	実数	%	%	実数	%	実数	%	%
はい	13	26.0	17	34.0	30	14	31.1	19	34.6	33
いいえ	31	62.0	32	64.0	63	9	20.0	11	20.0	20
無答	6	12.0	1	2.0	7	22	48.9	25	45.4	47
計	50	100.0	50	100.0	100	45	100.0	55	100.0	100

た」「結婚後1年間は作らない方針でいたが1年経過したので」と答えている。

結婚すれば妊娠するのは当然であっても昔は子宝に恵まれる、子どもはさずかりものといった神秘的な天の配剤といった考え方が支配していたが、現在は男女を自由に生み分けることはできないにしても、子どもは自分たちで計画的に作るものという考えになっているのであろう。

2）妊娠は避けたいと思っていたか

最近は子どもを少なく生む傾向がありこの調査の前問でもみられたように受胎調節をしている人がかなりあり子どもを欲しがらない人が多いのではないかと思われる。そこでこの質問をしてみると妊娠を避けたいと思ったのは30%で前回と同じであるが逆にこの質問に対して否定した人、即ち子どもを欲しいと思った人は63%もあり前回の調査の3倍強となっていてむしろ現代の人の方が子どもを欲しがっているといえる。また前回は無答が半数近くもあったが今回の調査では7%であり、前の質問と同じようにはっきり意志表示をするようになっている。妊婦に対して「今度の妊娠は避けたいと思っていたか」というのは酷な質問であり現在は自分の感情を率直に表現するようになってきているが、昭和22年頃はお腹の中にいる子を否定するようなことはたとえ思ってはいても罪障感を感じて中々発言できなかったのであろう。

次に何故妊娠を避けたいと思ったかその理由をたずねてみると第6表のようになり（一人でいくつかの理由をあげた場合は別の項目とした。以後の表も同様）、初産婦の場合は前回同様に「2人の生活を確立してから」「万事スローモーションで家事もよくできないから、もう少し結婚生活になれてからと思った」といった〝結婚当初のため〟が1位となっている。経産婦の場合は上の子と年齢が近すぎるが1位であり、すでに子どもがいるからもう欲しくないというのではなく適当な年齢の間隔をおきたかったと計画的な出産を望んでいたといえる。前回三分の一を占めていた経済上の理由はごく少数で生活事情の好転を物語っている。

また、この質問に否定した人に妊娠を希望した理由をたずねてみると第7表のようになり経産婦の場合は前回同様にすでに子どもはいるがもっと欲しいが1位となっている。跡継ぎがほしいと答えた人は、前回は14例あったがこの調査では僅か2例であり現在は子どもを独立した人格として認め家のためとか自分たちの老後のために

第6表　妊娠を避けたい理由

	昭和46年				昭和22年			
	初産婦	経産婦	計		初産婦	経産婦	計	
				%				%
経済上	1	1	2	6.3	6	15	21	32.8
すでに子どもがいるから	—	2	2	6.3	—	11	11	17.3
結婚当初のため	10	—	10	31.2	7	—	7	10.9
勉強・職業を続けたい	4	—	4	12.5	2	—	2	3.1
子ども嫌い	1	—	1	3.1	3	—	3	4.6
上の子と年齢が近すぎる	—	9	9	28.1	—	—	—	—
その他	1	3	4	12.5	2	5	7	10.9
無答	—	—	—	—	9	4	13	20.3
計	17	15	32	100.0	29	35	64	100.0

第7表　妊娠を望む理由

	昭和46年				昭和22年			
	初産婦	経産婦	計		初産婦	経産婦	計	
				%				%
子どもが好き	3	5	8	11.6	8	4	12	18.5
もっと欲しい	—	19	19	27.5	—	17	17	26.2
流産したから	4	2	6	8.7	—	—	—	—
子どもを失なったから	—	—	—	—	—	9	9	13.8
跡継ぎがほしい	1	1	2	2.9	11	3	14	21.5
若いうちにほしい	3	1	4	5.8	—	—	—	—
子どもがいるのが自然の姿	7	2	9	13.0	—	—	—	—
その他	6	4	10	14.5	9	4	13	20.0
なし	9	2	11	15.9	—	—	—	—
計	33	36	69	100.0	28	37	65	100.0

子どもを生むことはできなくなってきている。子どもは「結婚すればできるのは当然」だし、「家庭は子どもがいるのが自然の姿」「二人きりで一生送るなど考えられない」とごく自然に妊娠を受けとめている。その他としては「主人がほしがるので」「子どもがいた方が姑とうまくいく」と家族間の人間関係を円滑にするために欲しがったり「前は欲しくなかったので中絶したが最近になって子どもを育ててみたくなった」と母性本能を感じている人もある。

以上のように前回妊娠を避けたい理由の首位を占めていた経済上の理由は大きく後退し、妊娠を避けねばならない理由はなくなってきており、もう少し先に行ってからほしかったと考えている。子どもが嫌いだから欲しくないというのは前より減じ、ただ1例にすぎないが、これは子どもが好きでない場合、つくらないように受胎調節をしたり、前回調査した昭和22年はまだ堕胎が許されていなかったが現在は人工妊娠中絶が認められており、妊娠しても中絶してしまうので今回の調査対象となった継続受診者の中には表われてこないためともいえる。

3)　妊娠を自覚した時期

女にとって結婚は人生の一つの転機ではあるが、妊娠を自覚することは母性意識の成立していく第一段階の過程であるといえる。そこでいつごろ妊娠を自覚したか、またその時の感情はどうであったかを質問した。ここでの妊娠を自覚した時期とは母親としての自覚というのではなく身体的に妊娠に気づいた時期を質問した。その結果は第8表のように前回と大差なく殆んど妊娠3か月までに気づいている。前回は5か月、6か月になってようやく気づくものもあったが今度の調査では全員が4か月までに自覚している。これは科学的な知識が豊富になっ

第8表　妊　娠　自　覚　期

	昭和46年					昭和22年				
	初産婦		経産婦		計	初産婦		経産婦		計
	実数	%	実数	%	%	実数	%	実数	%	%
妊娠1か月	10	20.0	21	42.0	31	15	33.3	27	49.1	42
〃 2か月	21	42.0	17	34.0	38	8	17.8	12	21.9	20
〃 3か月	18	36.0	12	24.0	30	17	37.8	8	14.5	25
〃 4か月	1	2.0	—	—	1	2	4.4	1	1.8	3
〃 5か月	—	—	—	—	—	3	6.7	5	9.1	8
〃 6か月	—	—	—	—	—	—	—	2	3.7	2
計	50	100.0	50	100.0	100	45	100.0	55	100.0	100

第9表　妊娠自覚期の感情

	昭和46年						昭和22年					
	初産婦		経産婦		計		初産婦		経産婦		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
喜び	30	52.6	25	47.1	55	50.0	26	45.6	20	36.4	46	41.0
不安・恐怖	9	15.7	3	5.7	12	10.9	19	33.3	10	18.2	29	25.9
驚き	3	5.3	2	3.8	5	4.5	3	5.3	2	3.6	5	4.5
緊張	—	—	—	—	—	—	2	3.5	—	—	2	1.8
失望	1	1.8	3	5.7	4	3.6	1	1.8	2	3.6	3	2.7
困惑	4	7.1	7	13.2	11	10.0	—	—	—	—	—	—
不喜	—	—	—	—	—	—	—	—	3	5.5	3	2.7
早すぎた	1	1.8	5	9.4	6	5.5	—	—	—	—	—	—
なし	9	15.7	8	15.1	17	15.5	6	10.5	18	32.7	24	21.4
計	57	100.0	53	100.0	110	100.0	57	100.0	55	100.0	112	100.0

たためと、もう一つには前述しているように計画的に出産を考えているので子どもを待望しているために妊娠にすぐ気づくとも考えられる。

妊娠を自覚した時どんな感情であったかを質問すると(第9表)「欲しいと思っていたので嬉しかった」「上の子のあとずっとできなかったのであきらめていた、すごく嬉しかった」「自分一人の秘密にしておきだまって楽しんでいたいような気持」「嬉しい、何年もできなかったし、2回も流産しているので半ば諦めていた、待ち望んでいたのでメンスがないとすぐに妊娠したとわかったがもし違ったら困ると診察に来るのをのばしていた」と半数の人が喜びの感情をもっている。同時に「無事な子が生まれるか心配」「自分もまだ子どもなのに母親としてやっていかれるか」と「やっと一人前になれた」とは思いつつも嬉しさと不安の交錯した感情を味わっている。

「面くらった」「失敗したと思い嬉しいとは思わなかった」「子どもが好きでないし仕事をしているのでその都合もあり一寸困った、中絶しようか、年なので思いきって生もうかと散々迷った」「未入籍なのですごく複雑な気持」「間違いならいいな」「予想外でびっくりした、一応計画していたのだが失敗した、上の子が母乳のためメンスがなくわからなかった、いまはかえって年がついている方が遊び相手としていいと思うようになった」「子どもにはかわいそうだがよほど中絶しようと思ったが主人にいわれ生む決心をした」と少数の人は素直に妊娠の事実を喜んではいない。また「特に何とも思わない」「計画していたからわかっていたので実感がわかない」「できたな」「ああ、そうか」と当然のこと、ごく自然の成り行きとして「平静な気持」で妊娠を迎えて

第10表　態　度　の　変　化

	昭和46年				昭和22年			
	初産婦	経産婦	計		初産婦	経産婦	計	
				%				%
食事に注意	22	17	39	26.2	11	8	19	15.1
睡眠・休息	6	18	24	16.1	—	—	—	—
体を保護	18	17	35	23.5	9	8	17	13.5
薬をのまない	2	3	5	3.4	—	—	—	—
薬をのむ	—	—	—	—	7	4	11	8.6
夫婦生活に注意	3	1	4	2.7	—	—	—	—
適度の運動	1	—	1	0.7	6	1	7	5.5
その他	8	3	11	7.5	1	3	4	3.2
なし	13	17	30	20.1	30	38	68	54.0
計	73	76	149	100.0	64	62	126	100.0

いる人たちもある。

前回の調査と比較してみると大体同じような傾向ではあるが、詳細にみてみると不安や恐怖感は減少してきてむしろ喜びの感情をもつ人が多くなってきている。しかし逆に嬉しくない、困ったという人も増加しているがこれは妊娠を予定していなかった人たちでその数は少ない。

4)　妊娠による態度の変化

妊娠により自分の体内に新たな生命が誕生すると体を大切にするなど妊娠前と態度は変化するがどのような変化があるかをみた。第10表のようにまず食事に注意し「普段から食べものをあまりとらない。特に牛乳や卵は嫌いだが妊娠してからは1日に卵1個、牛乳1本は努力して食べる」「栄養のあるものをとる」「貧血なので増血するようなものを食べる」「辛いものが好きだったが食べないようにしている」「お酒、コーヒーをやめた」と胎児への栄養を考え努力している。最近人工甘味料や着色剤、食品添加物の人体への悪影響が話題になっている折柄、「田舎の実家から純粋な食糧を送ってもらっている」「清涼飲料など飲まないようにしている」など食べ物に神経を使っている。「重い物は持たない」「外出しても体をかばう」と体を保護したり、同じようなことではあるが睡眠や休息を充分にとるようにしている人もかなり多い。特に流産の経験がある人たちは食事の面よりも動きすぎないよう、高い所のものはとらない、夫婦生活をセーブするなど体を保護することに重点をおいている。その他としては退職したり、トキソプラズマの心配から動物に近づかないようにしている。「健康なので特に何も気をつけていない」「いまいる子に注意がいきおなかの赤ちゃんのことまで気がまわらない」と特別に態度の変化のない人もかなりある。

前の調査では特に態度の変化はないと答えた人は半数以上の54%もあったが今回は20%に減少し、食事に注意したり睡眠や休息をとり体を保護するものが増加している。現在の人たちの方が妊娠中から赤ちゃんに気を配り神経質になっているが、前の調査は昭和22年でまだ社会状勢が悪く栄養のあるものをとりたくても配給制度では思うにまかせず、戦災や外地引き揚げ、祖父母との同居で同居世帯が多く自由に休息をとることもできないといった生活事情の悪さも原因していると思われる。

また以前の調査では薬をのむと答えた人たちが11例あったがこの度の調査では1例もなく、むしろサリドマイドやスモン病等薬害の怖しさをまざまざとみせつけられているので「薬をのまないようにしている」「少しぐらいの風邪なら薬をのまずになおしてしまう」と服薬しないようにしている人が5例あった。このように態度はさまざまでもすべて胎児への影響を考えてのことであってすでにここから母親になるための心構えの第一歩が始まっている。

5)　つわり及びつわり後の身体的異常

つわりやその後にくる身体的な異常は病気ではないが、苦しくつらいものである。人によって重い人やほとんど症状のない人など個人差があるし、同じ人でも妊娠のたびにいつも同じような症状とは限らない。そこでつわりについて質問してみた。食欲がない、むかむかする、或いは嘔吐の症状が多い。倦怠感や睡液分泌もあり、その他としては不眠、夜間の頻尿、胃痛、頭痛、顔面がはれるなどの症状もあった。ごく軽く「すっぱいも

第11表　つ　わ　り

	昭和46年				昭和22年			
	初産婦	経産婦	計		初産婦	経産婦	計	
食欲不振	4	6	10	8.9%	35	32	67	37.4%
悪心	21	14	35	31.0	26	27	53	29.6
嘔吐	14	11	25	22.1	13	13	26	14.5
倦怠感	2	2	4	3.5	8	6	14	7.9
唾液分泌	1	—	1	0.9	2	1	3	1.7
その他	5	2	7	6.2	—	—	—	—
軽度	8	12	20	17.7	2	2	4	2.2
なし	8	3	11	9.7	6	6	12	6.7
計	63	50	113	100.0	92	87	179	100.0

のが食べたい」「歯みがきの臭が鼻につく」程度を軽度とした。また「つわりがないので妊娠を疑った」ようにつわりが全くない人も10%弱いる。つわりは「ひどくて寝てばかりいた、40日間吐くばかりだった」「嘔吐がひどく脱水症状になり8日間入院した」「嘔吐がひどくしまいには血を吐いた」りする程重症な人もあるが「自分ではひどくてつらいと思ったが、母にいわせるとつわりともいえない」というように主観的なものであるし、「勤めていたので他人に迷惑をかけないよう気が張っていた」「結婚して地方に行き話し相手がなく気がまぎれずつらかった」と心理的要因によることもあるので一がいに2回の調査を比較することは難しい。重い軽いの差はあれ少数の人を除いては何らかの症状を訴えている。

つぎにつわりの時期を過ぎてもなお身体的に異常があるかをたずねてみた。半数の47%の人は順調な経過で異常がないと答えているが、腰痛（15例）腹部が突っ張る（13例）、疲労倦怠（10例）、悪心、嘔吐、貧血、出血、おりもの、足が吊る、胃痛、めまい、夜間頻尿、不眠、頭痛、寝汗、湿疹、寝返り困難、肩こり、鼻血、耳がふさがった感じ、と実にさまざまの症状を訴えている。これは前の調査も同じような傾向で全く異常がない人は40%で残りの人は上述のような身体的な異常がありつわりと同様に個人差がみられる。

6）心理的異常の有無

妊娠するとつわりなどの身体的な異常が起こるが、心理的にも異常があるかを質問した。その結果は第12表のようにいら立ちやすい41.8%、一寸したことで神経質になる8.2%、喜怒哀楽が強くなり何でもないのに涙もろくなる9.8%、と60%の人たちは異常心理を自覚している。その他として明るくなった、おちついた、穏やかになりすべてのことが受けいれられるような広い気持で大らかになった、とプラスの方向になった人もあるし、テレビなどスリラーものが見たくなった、怖い夢をみるという例もあった。また3割以上の人はこのような異常心理を体験していない。このような傾向は前の調査でもほぼ同じである。いら立ちやすいが経産婦に多くなってい

第12表　妊娠中の異常心理

	昭和46年				昭和22年			
	初産婦	経産婦	計		初産婦	経産婦	計	
いらだちやすい	16	35	51	41.8%	14	26	40	38.1%
神経質	6	4	10	8.2	9	7	16	15.2
喜怒哀楽強い	11	1	12	9.8	—	—	—	—
その他	5	3	8	6.6	3	3	6	5.8
なし	25	16	41	33.6	23	20	43	41.0
計	63	59	122	100.0	49	56	105	100.0

第13表　母としての自覚

	昭和46年				昭和22年			
	初産婦	経産婦	計		初産婦	経産婦	計	
				%				%
責任感	7	10	17	16.0	6	10	16	16.4
不安・恐怖	5	2	7	6.6	6	2	8	8.2
実感・緊張	9	8	17	16.0	2	0	2	2.0
母性愛	3	3	6	5.7	8	3	11	11.2
喜び	4	1	5	4.7	1	3	4	4.1
その他	3	4	7	6.6	—	—	—	—
なし	25	22	47	44.3	23	34	57	58.2
計	56	50	106	100.0	46	52	98	100.0

るがこれは初産婦の場合は「2人きりなので気楽に過せる」が、経産婦になると「子どもがちょこちょこ動きまわるが体の自由がきかないのでいらいらし、かっとなる」「子どもがいたずらすると普段は寛容でいられたのについ怒ってしまう」と発育ざかりの子どもをかかえているために起る現象ではあるが「気が短かくなりいらいらして子どもを叱ってしまうが、その後で何故あんなことで叱ったのかと反省」し無自覚に異常心理を爆発させているわけではないし、「怒りっぽくなるので自分で気をつけている」し「つわりの時は食事がとれず体が衰弱していたのでいらいらすることがあったがそれ以後は何でも食べられるようになりおさまった」と身体の不調も関係しているようである。「いらいらしても子どもにあたることは避けたいので夫にあたってしまう」「夫に甘えるようになった」「主人がいろいろ気を使ってくれるのでいらいらすることなどない」とこのような時にこそ夫の理解が必要と思われる。

7）母としての自覚の有無

いくつかの質問の中でこの質問は一番答えにくいようであった。自分たちの私生活、特に夫婦生活のことでもためらわずに答えてくれた人たちもこの質問には戸惑ってしまうらしい。「母親としての自覚がありますか」「母親らしい感情を感じていますか」「赤ちゃんに対してどんな感情をお持ちになっていますか、例えば責任感とか、愛情とか……」とかなり具体的に質問しないと何か漠然としたものは感じてもそれを言語化することが難しい。一応答えてくれたものを分類集計したのが第13表である。半数近い44%の人はまだ母親としての自覚を感じていない。残りの半数のうち責任感を感じているもの、母親になるとの緊張感・実感を感じているのが各々16%であった。不安や恐怖、母性愛、喜びの感情をもったものもある。このような感情は妊娠と同時に感ずる人もあるが妊娠初期は「自分の体を健康に保つことが今は第一で母としての自覚などまだ考えられない」のが普通で、児心音を聞いたり胎動があると感ずるようである。次の例は妊娠5か月の初産婦で診察前にインタービューを行ない診察の時に初めて児心音を聞かせてもらい新鮮な印象を診察後に語ってくれた。「まだ胎動も感じないし、ぴんとこない、自分の体のことが気になる、つわりがひどくて血を吐いた、5か月のいまもまだむかむかし嘔吐することもあるので子どものことは考えられない」。診察後、「いま児心音を初めて聞かせてもらった、まだこんなにべちゃんこなお腹なのに、もうちゃんと聞こえるんでびっくりした。中にいるんですねえ。何も気をつけてあげていなかったのに生きていてくれたんだなと思いこれからはしっかりしなくてはと思った」といっている。

昭和22年の調査と比較してみると前回もやはり同じように半数はまだ母親としての自覚が生じてきていないし、妊娠月数がすすみ胎動があると責任感や母性愛を感じ始めている。現在の妊婦たちは妊娠にあたって計画的ではあっても母性意識が成立していくのには同じような経過をたどっていくように思われる。今度インタービューした中からいくつか例をあげて子どもに対する感情の変化と母としての自覚をみていきたい。

「ぴんとこないが最近動き始めたし、いろいろ用意すると少し感ずる。信じられなかったり、そうなんだなと思う」「不安の方が大きい」「母性愛がわくというが動くと気持が悪い」「今までは子どもに関心がなかったがよその子をみてもかわいい、まだ自分の子どもに対しては、はっきりつかめない」と妊娠初期にはまだ信じられない気持や不安が目立っている。

「胎動を感じた時から自覚をもった、女はおなかにいる時から母親なんだなとつくづく感ずる」「よその子がオ母サン、オ母サンと母親を信じ頼っているのをみると自分もああいうふうになれるんだな、最後には母親に戻るのでお母さんてすばらしいし嬉しい」「始めは何も感じなかったが動き出してから幸福感を感ずる」「5か月頃から動きはじめおむつや布団など縫い始めるとしっかりしなくてはとの責任感をもつ」と責任感や喜びの感情を持ち始め、「胎動があると感じ始める、それまではただ苦しいだけだった、いまはもし何か事故が起きて赤ちゃんか自分のどちらかを助けるということになったら自分とひきかえに助けてほしいぐらいのいとおしい気持」にさえなってきている。

経産婦の場合は「最初の時は予定していなかったので生まれるまでは感じなかった、今回の方が欲しかったので妊娠した時から強く感ずる」「前の子よりも感ずる、前は祖母が初孫なので全部面倒をみてくれた、今度は自分でやれるしやらなくてはならないから」「前は不安だけだった、2度目の方がゆったりした気持で迎えられる」と経験により母としての自覚を強くもつようになっているが、逆に「いまいる子の方が実感としてかわいい」「顔をみるまでは感じない、害になることは避けるが今いる子に注意がいく」「正直いって今度はうすれてきた、前はお腹に入った時からこうなってこうなってと経過をたどってきたが今度はお腹に入った時には何も感じない」「どこでも上の子が虐げられているように思うのでそうなりたくないからいまいる上の子を大事にしているしかわいい、お腹の中にいる子の方が体のぐあいも悪いせいか自分に抵抗があるように自分には感ずる、そう思っては悪いのかもしれないが」と最初の子ほどの期待や愛情がみられない場合もある。このような妊娠中から第1子、第2子に抱く感情の相違が出産後の育児態度にも影響するかは今後の研究にまたなければならないが「夫婦2人だけの時は表面的に過していた、子どもができると子どもの存在、家庭というものをしみじみと考え平和で円満な家庭生活を考える」「今までは常識はずれの無責任な生活をしていたが主人や自分の生活を子どもの目から見たらどうみえるだろうというように変ってきた、生活も不規則にならないように注意し尊敬されるおとなになりたいど夫と話しあう。自分の考えを主人に押しつけても素直に聞くようになった」「妊娠は生活設計というよりも幸せの中から夫婦の間で盛り上ってくるもので夫婦の気持、愛情がたかまりもう一人持つことになた」というように夫婦間の信頼や愛情が生まれ出る子どもへ影響するであろうことは否定できないし、親としての責任感や自覚の根底になっているといえる。

8) 胎　教

昔行なわれていたお呪い的な胎教は別として、流早産を予防するためにも妊娠中は精神的安定を保つことが必要であるがこの点を質問した。それによると〝胎教〟という言葉は2人を除いて全員が知っていたが半数以上の62名の人は特に何もしていない。しかし音楽をきく(12)、心楽く平静な気持を心がける(17)、刺激的なものは避ける、読書(5)、絵を見る(1)、趣味のことを続ける(1)という態度をとっている。前の調査ではかかる態度をとったものは29例であったがこれは生活状態が悪くてこのようなことを考える余裕がなかったためかもしれないし、いまは非科学的なことには同調できないが理屈の通ることなら取り入れていくのであろう。

9) 生まれる子どもへの期待

妊婦にこれから生まれてくる子どもにどんな期待をもっているかを質問したのが第14表である。前項で母としての自覚はまだ感じられないと答えた人たちは44.3%と半数近くもあったが、具体的に子どもへの期待を質問すると「考えてない」「漠然として感じられない」と答えた人は2例だけでほとんどの妊婦は子どもに対して夢や希望をもっている。その内容をみると五体満足、健康と身体に関する希望が大多数を占めている。「五体満足で健康な子で普通にお産できれば何もいうことない」というのが妊婦たちの願いである。妊娠する前にはいろいろ望んでいても「妊娠するまでは男の子で自分より頭の良い子であってほしいと思っていたが妊娠してからは男とか女とかそんなことはどうでもよい、奇型などない普通の子であってほしいとそれのみ願っている」「娘時代には女の子はいやで男の子が欲しいと思っていたがいまはそんなことより丈夫で元気な子でさえあればという気持」になっている。流産、死産の経験を重ねた人は無事に出産してほしいとの願いはもっと切実で「五体満足にこしたことはないけれどともかく生きてさえ生まれてくれれば五体満足でなくてもいい」「流産しているので無事に生まれてほしいとのみ思っている」と非常に消極的な要求になっていて出産後の子どもの姿はまだ考えられないらしい。「ただのサラリーマンではなく学者になってほしい」「建築家になってほしい」と子どもの成長後の職業にまで思いを馳せらせているのはごく僅かであった。

22年の調査をみると五体満足は11.6%、健康が少し多く18.8%になっており現代は新聞やテレビ等で肢体不自由児や病児の話題が取り上げられたりするのでかえって身体的な不安を感じているのであろう。「素直で誰にも

第14表　生まれる子への期待

	昭和46年					昭和22年				
	初産婦	経産婦	計	%	産婦	初産婦	経産婦	計	%	産婦
五体満足	25	18	43	32.1	19	14	1	15	11.6	15
健康	28	26	54	40.3	17	2	22	24	18.8	1
普通の子	2	3	5	3.7	3	—	—	—	—	—
素直	3	—	3	2.2	3	8	3	11	8.6	5
明朗など性格	2	1	3	2.2	—	—	—	—	—	—
親の性質が遺伝しないこと	—	—	—	—	—	17	17	34	26.6	6
怜悧	—	—	—	—	—	4	2	6	4.7	4
男	3	6	9	6.7	4	4	2	6	4.7	10
女	—	8	8	6.0	9	6	12	18	14.0	3
育児方法	2	—	2	1.5	1	—	—	—	—	—
その他	2	3	5	3.7	6	—	2	2	1.6	—
なし	1	1	2	1.5	3	4	8	12	9.4	6
計	68	66	134	100.0	65	59	69	128	100.0	50

好かれる子」「上の子がまめに動くのでどっしりした上の子と性格の違った子が欲しい」「のびのびした子」「明るい子」と性格面に期待をもっている人はあるが、同じ性質でも前の調査では親の性質が遺伝しないことを考えていたのが26.6%あったが今度の調査では1例もなく性質は遺伝するのではなく親の育児法によってきまると考えるようになっているのかもしれない。また前回6例あった怜悧も今度の調査では1例もなく上に精薄児など障害のある子を持った親は「高望みはしない、普通の子であればよい」といっている。以上のようにみてくると最近は教育ママという流行語さえあるほど一流校へ入学させたいなど子どもに大きな期待をかけているようであるが、今度の調査ではそのような傾向はみられずむしろ要求水準が低下しているようである。しかしこれは目前に出産という大きな難関を控えているためと、薬の害や交通地獄、大気汚染、果ては母乳の農薬による汚染等々われわれを取り巻く社会環境の悪さが妊婦たちを消極的にしているのかもしれない。従って無事に五体満足で健康な子どもを出産し最低の希望が叶えられた母親たちは要求水準が高くなってくるかもしれない。そこで次に産婦たちに質問した子どもの将来に対する期待を眺めてみることとする。

10）子どもの将来に対する期待

「無事に生まれたのでつつがなく育ってほしい」「健康でいてくれればよい」と健康に対する希望が大きな比重を占めてはいるが、素直、正しい人、愛される人、明朗、活潑、自立心のある人等表現は違っても精神的健全さを望むようになってきている。「特に期待などない」と答えていても「忙しさでせい一杯」「さしあたって湿疹がなおってくれたら」「先のことなど考えられない、明日、明後日のことが心配」と急に忙しくなった家事、育児に追われ先のことを考える余裕がないのが実感であろう。

第15表　子どもの将来に対する期待（産婦）

	昭和46年		昭和22年	
		%		%
健康	25	39.7	13	32.5
素直	2	3.2	3	7.5
正しい人	4	6.4	4	10.0
愛される人	2	3.2	2	5.0
明朗・のびのびした人	6	9.5	—	—
活潑	2	3.2	—	—
自立心	5	7.9	—	—
個性教育	3	4.8	5	12.5
育児への反省	3	4.8	—	—
その他	5	7.9	—	—
なし	6	9.5	13	32.5
計	63	100.0	40	100.0

「明るく素直なかわいい子に育ってほしい、それと健康であってほしい」と1人でいくつもの期待を述べているので延回答数が63と前回の40を大巾に上回っている。

第16表　出産に臨む心

	昭和46年				昭和22年			
	初産婦	経産婦	計		初産婦	経産婦	計	
				%				%
不安	21	16	37	31.4	23	28	51	50.5
恐怖	19	7	26	22.0	8	—	8	7.9
苦痛	1	4	5	4.2	—	3	3	3.0
正常産を望む	—	4	4	3.4	—	—	—	—
安心	9	8	17	14.4	8	15	23	22.8
なし	14	15	29	24.6	7	9	16	15.8
計	64	54	118	100.0	46	55	101	100.0

また「なし」と答えたのは前回の半数になっているし、前の調査ではみなれなかった育児への反省等からみて妊婦の場合は要求水準が低くなったようであったが出産後の母親たちは、育児に関心があり子どもに対して多くの期待をもつようになったといえる。

11）出産に臨む心

〝案ずるより生むが易し〟の諺さえできているようにあれこれ心配するほどのことはないのか、或いは〝お産は障子の桟が見えなくなる〟ほど大変なものなのか経験のない人には一寸想像できない未知の世界であり、妊婦たちにとって逃れることのできない危機的場面のお産に対してどのように感じているかを質問した。第16表のように不安や恐怖を感じているものが53％と半数以上を占めている。初産婦の場合は「未知に対する不安」「不安、こわい、初めての経験なのでどんなことが起るのかこわい、誰でもやっていることだからとなるたけ思うようにはしているが。初めての診察の時もびっくりして、こわくてショックで2日くらい食欲がなかった。だからお産もどんなことが起るのかと思うとこわい。母は前に亡くなったので聞くこともできず余計にこわい」「どんな痛みかわからないので恐怖感と不安を感ずる、母と離れているので心細い」「はじめは嬉しいだけだったが最近こわくなってきた」と未知に対する恐怖・不安を感じている。しかし「母親学級に出ていろいろ教わったので不安は全くない、誰でもしていることなのでできないことはないから何とも思わない」「安心している、母親学級に出ているのでまかせていれば大丈夫と思っている」「初めのうちはすごくこわかった、死んじゃうんじゃないかと思った、母親学級に出てから成り行きにまかせようと思いおちついた」「まわりのお産した人に話をきくとおどかされるばかりでよくない結果」と言っており正しい科学的知識を与えることによりある程度不安を取り除くことはできる。経産婦の場合は「いつも軽いので不安は全くない、先生と冗談を言いながら生んでしまうので安心している」「お産自体は経験があるので別に何とも思わない」と経験により未知の不安がなくなる人もあるが、「一度目がわかっているだけに思い出すとこわい、痛みは思い出すとぞっとするぐらいいやだ」「こわい、最初の時はわからないからこういうものだと思い無我夢中だったが、2回、3回となると次ぎにはこういう痛みが起こる、次ぎはこうとわかっているのでかえってこわい、経産婦だと看護婦さんも安心しているせいか放ったらかされているような気がしてかえって心配になる」とかえって不安や恐怖が増す場合もある。殊に1回目のお産がスムーズにいかなかった場合にはこの傾向は強く「不安が強い、上の子の時子癇で3回も意識がなくなったので心配」「上の子の時早期破水し分娩に時間がかかった、そのようなことがないように」と思っている。また「お産の時上の子を離さなければならないのでその方が心配」になったり「2回目は早く生まれるというので間に合うか心配」している。

次ぎに前の調査と比較してみると、不安と恐怖は大体同じような心理状態と思われるのでこれを合計すると55％内外でほとんど同じであるし、〝なし〟と答えている人も平静な安心した気持であると思われるので安心となしを合計するとこれも38％と一致した数になっている。このようにみると出産を迎えるにあたっての心理状態はいつの時代でも同じであり、不安や恐れを抱くものと全く反対の感情を持つものとの両極に別れる。このような感情の相違が分娩の重いかるいに直接関係はないであろ

うが、分娩時に産婦が強い恐怖心を持てば体が固くなって分娩に拒否状態を起してしまうであろうし、ゆったりとした気持であれば娩出が速やかになることが有り得るのではなかろうか。分娩そのものも勿論各人各様であり、また痛みを感じやすい人と我慢強い人とはあろうが、妊娠中の心理状態や出産に対する心構えがかなり分娩に影響するのではなかろうか。

12） 出産前後の子どもへの感情の変化

産婦のインタービューは出産後３日目に行なったが出産の疲労からも回復し始め、健康な赤ちゃんを産むという責任ある大役を果たした後の安心感からか妊婦と違って非常に明るい顔つきであるのが印象的であった。妊婦に限らず病院の待合室にいる患者たちは一様に黙りこくって判決一診断が下される前の不安とおびえた表情が特徴的であるが、出産は病気ではないので無事に分娩が終ればその後の入院生活は苦痛ではなくむしろ忙しい家事からの解放感を味わっているのであろうが、それよりも胎内にいた時に想像していたのとは異った子どもへの愛情が母親たちに幸福に満ち溢れた表情をさせるのであろう。次ぎにいくつかの例を挙げ子どもへの感情の変化をみていきたい。

「陣痛が２日間も続きあまり苦しいので途中でやめようか、もしこのまま放棄したらどうなるかなと思ったりした。先生に叱られ周囲はただ助けてくれるだけだから自分で生まなくてはという気持になり産んだ。ふだんは我慢強いし痛みには強いのだが出産直後はもうお産はいやだ、こりごりという気持だったが３日も経つともう痛みも忘れてしまった。普通の子だし、大きくてしっかりしているのでほっとしたというのが一番。分娩室で顔を見せられた時はじーんときた。それから長いこと逢わず授乳に行く度にかわいさが増してくる」

「お産に対して不安はなかったのに陣痛が始まってから怖くなってしまった。分娩室で顔を見せられた時、あ、これなんだなと思いほっとして気が遠くなってしまった。自分の手で抱いてみると本当にかわいい、お腹にいた時とはまるで違う。いまはお産の怖さも忘れて、また子どもが欲しいと思っている」

「陣痛微弱で長くかかった。午後の予定というので、気持が張りつめていたが午後になっても子宮の開きが悪いといわれがっかりして力が抜けてしまった。これ以上長く続くのならお産なんてもうこりごりだと思った。点滴で促進しやっと生んだ。でも３日もしたらどんな痛みだったかもう忘れてしまった。妊娠中ぴくっと動くとかわいいと思っていたが生まれてみないことにははっきりしなかった。まだ何か母としての実感はないが見ているとすごくかわいいし責任を感ずる。一寸でも工合が悪いと自分のことのように気になり血のつながりを感ずる」

お産の痛みは忘れやすいというようにあの苦痛の代償としてのかわいいわが子を見た瞬間に陣痛から分娩にかけての苦斗の何時間は夢であったかの如く遠い過去のものになってしまう。

「上も男今度も男なので大変責任が重いような感じがした、生活は楽ではないが親としての自覚以外にない。子どもを生むことはすばらしいし沢山子どもがほしい。女のために喜ばれる一番の特権だと思う」「結婚前は子どもが嫌いで甥や姪もうるさく関心がなかった、子どもを持ってからはよその子にも関心がでてきた。妊娠中はただ五体満足しか考えないが生まれてみると一段とかわいいしあれもこれもと考えてしまう。今まで生きてきた中で一番よかったことは子どもを生んで育てることだと思う。一番嬉しいことだと思う。日常生活なんて大したことない」と母になった喜びを述べている。

「今度が一番かわいく感ずる。妊娠中からお腹の子にいろいろ話かけていた。最初の子は何も彼も未経験なので必死だったが今度は３回目なので精神的に余裕があるせいかもしれない」「妊娠中は愛情というのではなくなるべく良い子に育つように栄養とか胎教を考えるくらいで、その子に対する愛情よりは責任感を感じていた。抱いて母乳をやっているうちに母性愛がわいてくる、本当にかわいい、泣いてもかわいく思う、１人目の時はそういう気持ではなくただおろおろするばかりだった」「ずっと前から出会っていたような気がする、胎動があったのでそう感じたのだと思う、上の子の時は胎動がなかったせいかそういう感じはしなかった、上のＣ子は精薄児だがそれでもこんなにかわいいのだから普通の子ならどんなにかわいいだろうと思っていた、生まれた時からとてもかわいいし育てるのがとても楽しい、余裕がある感じがする」と経産婦の場合には喜びと同時に育児に楽しみさえ感じ経験者の余裕をみせている。しかし「３人目だと大事にするしかわいい」「赤ちゃんていいものだなと思う、３人目になると親の精神状態によるのかもしれないがゆったりした気持でいられる、多分末っ子になると思うので大事に育てたい、わがままにはしたくないが」と同じ自分の子どもであっても出産直後から上の子とは違う感情を抱いており、このような差別が余りに強くなると兄弟関係に問題が生じてくるであろう。最後の例は妊娠する前は「子どもは２人でいいと思い受胎調節していたができてしまった」といっており「胎動を感ずるまではおろそうかどうしようかという気持」であり「主人とよく相談して今回を逃すともう一生子どもを作

れないかもしれないので生む決心をした」人であって特に期待された子どもではない。というよりむしろ否定的な感情を持ってさえいたが、出産と同時に一番大事な存在になっている。妊婦から産婦への歩みの中で子どもに対する心理状態の微妙な変化が行なわれつつあるが、これをただ母性本能と片づけてしまうことはできず、好ましい母子関係成立のためには子どもに対してどのような感情をもって第一歩を踏み出したかによって決定していくのではなかろうか。

「夫婦2人という生活よりも母として強くなる、子どもをかばう、かわいがるという愛情を強く感ずる、女としてではなく母として強くなる、お産を通り越してはじめて強くなる、もしこの経験がなければ子どもに対して逆った感情になるのではないかと思う」「4kg近くもあり大きかったので上の子の時に比べればつらかった、正常位なので心配はなかったが生まれる瞬間に子どもの力と自分の力のバランスが釣り合わず子どもの力に負けてしまった、自分の方がいくじがないので頑張らなくてはと思って生んだ」分娩は病気と異り生理的なものなので医師や助産婦がいても注射をして痛みを和らげてもらうといった依存心は許されず、あくまでも痛みに耐えて産婦自身が生まなければならない。この経験が〝女は弱し、されど母は強し〟という強さを培っていくのであろう。

「一人の子を生んで大きくするということは責任重大。犯罪事件が世間を賑わしたりすると特にそう思う、親はどうせ先に逝くのだから自分に何かしてくれなくても少しでも人のため社会のために役に立ってくれればよい」「出産・育児は忍耐の明け暮れで忍耐ゆえに女の人は強くなっていく、これを過ぎて女として完成していくのだと思う。何といっても体力が欲しい、眠らなくてもよいような体力がほしい」「今までは自分のやりたいことをやっていたのがすべて子ども中心になり大人の生活のリズムもこの子の授乳時間や入浴によって変ってくる、今までならとてもそんなことできなかったのでそれが母性愛なんだなと思う」と自分のことは二の次といった母性愛、いじらしさを語っている。

また「今までは娘の立場でしか考えられなかったが母親になって初めて同じ親としての立場で考えられるようになり母を身近に感ずる」「初めて親の有難みがわかった」「人に面倒をみてもらうのは当然だと思っていたが親の有難みがわかった」と自分の母への親近感と感謝の気持を感ずるようになっている。

以上のように出産前後の感情の変化をみると22年前とほとんど変っておらず、目まぐるしく変化する社会状勢も出産前後の母親の心理には余り影響を与えていないようにみえる。

4. まとめ

昭和22年に妊産婦に面接してどのような過程を経て母性意識が成立していくかを調べたが、現在の母親たちは子どもに過保護になり一方では母性愛の欠除が指摘されることもあるので、20数年を経た今日同様の調査を行ないその変化をみた。即ち愛育病院利用の妊産婦150名に妊娠への期待、妊娠自覚期及びその時の感情、妊娠中の心身の異常、母としての自覚、出産に臨む心、生まれる子への期待、出産前後の子どもへの感情の変化、生まれた子の将来への期待について一人ずつ面接質問し自由に回答してもらい前回の調査と比較検討した。

(1) 妊娠は当然だと思った人は60%で前回同様であり、積極的に妊娠を避けたいと思った人は30%でこれも前回同様であるが、妊娠を希望した人は63%と前回の3倍強となっており妊娠に対する期待度は大きくなっている。また妊娠にあたっては計画的であり、初産婦の場合は結婚生活になれてから、経産婦の場合は上の子どもと適当な年令間隔をあけて欲しがっているしそのために受胎調節を行なっている人が多い。

妊娠を避けたい経済上の理由はごく僅かになり生活事情の好転を物語っているが、現在の民間アパートは子どもが生まれたら出なければならない所も多くそのために子どもが欲しくても作れない現状を思うとこの調査対象は非常に恵まれた集団であるということができる。またこの人たちは定期的な継続受診者であるので妊娠に対する期待度が大きくなっても、すべての妻が妊娠を希望するようになったと推測することはできない。

(2) 科学的知識が豊富になったためか、4か月までに全員が妊娠に気づいているし、不安や恐怖よりも喜びの感情をもっている。

(3) 妊娠によって態度にどのような変化があったか、即ちどんな点に注意をしたかについては前回同様食事に留意し睡眠や休息をとり体を保護するようになったと語っている。このような態度の変化がないと答えた人は54%から20%に減じており生活が安定したので胎内にいる時から配慮できるためであろう。

(4) つわりやその後の身体的な症状や、いら立ち易い等の異常心理は個人差があり時代の移りかわりによる変化はない。

(5) 妊娠中から母としての自覚を持ったかはやはり前回の調査と同様に半数のものはまだ持っていないし、胎動があると少しずつ母親としての責任感や母性愛が芽生

えてくるようである。

(6) 生まれる子どもへの期待は五体満足、健康が前回の調査を大巾に上回って大多数を占めている。これはサリドマイド児等の薬害の恐しさを知っているためであり、最低の希望であると同時に母親たちの最大の関心事であろう。前に26%あった親の性質が遺伝せぬことは今度は1例もなく遺伝よりも環境や教育を重んじており、妊娠についても計画的に子どもは作るものという考えと同じように子どもの性質も親の育児法により形成されていくと考えている。

産婦は最低の希望の五体満足が満たされたので子どもの将来に対しての要求水準は妊娠中よりも少し高くなり精神的健全さに注意が向いてくる。

(7) 妊婦は分娩に対しては前回と同じように不安感と恐怖心をもつものが半数以上を占め、4割近くの人は正しい科学的知識を得たり、安産の経験によって不安感を解消している。

(8) 妊娠中には母としての自覚を持たなかった人たちも無事に分娩して子どもを手に抱き母乳を飲ませた時に妊娠中には想像できなかった溢れるばかりの母性愛と喜びを感じ始めている。このように出産を境として愛情の動きがみられるがこれは20年前と余り変らず社会状勢の推移は影響がないようである。

しかし出生順位によって子どもへの愛情に差がみられる場合もありこの感情が育児にどう関わっていくか、また我々が教育相談の際に遭遇する拒否的態度の母親は出産前後に子どもに対してどのような感情をもっていたか、子どもとどのような触れ合いの中で子どもを拒否、或いは過保護、溺愛等の育児態度が確立するのかをこの研究を手がかりとして進めていきたい。妊娠の際の計画的な態度は育児にも反映し生まれた時からレールを敷き子どもの能力や特質を無視しても子どもをその上にのせて走らせようとするようになるのではなかろうか。また万一生まれた子に心身の障害があって自分たちの計画が挫折した時に子どもを受容することができるか家族計画の普及の反面疑問が残る。

この面接による研究結果から質問紙を作製し、地域別、出産条件別に多数の例数を集めて調査する予定である。

なお調査対象となった妊婦及び産婦は非常に協力的で質問に快よく回答してくれた。紙上を借り心から感謝します。

〔文　　献〕

牛島義友　家族関係の心理　p.34～p.58　金子書房　昭和30年

Researches for the Improvement of rearing New-born Infants

Jushichiroo Naitoo et al.

Chapter V　Investigation by Interview into Psychology of Expectant Women and Mothers with New-born Babies

Dept. 8　Yoshitomo Ushijima
Reiko Yukawa

In 1947 we had an individual interview with each of expectant women and mothers with new-born babies to find out through what process she had come to have clear consciousness of motherhood. As present mothers are considered to be too intent on their children's education, but at the same time to be lacking in maternal affection, we have made investigation, compared and discussed the results.

For the present investigation, we had an individual interview with each of 100 pregnant women and 50 mothers with new-born babies and asked her on expectation of pregnancy, feeling when she was conscious of pregnancy, abnormality in the conditions of mind and body during pregnancy, consciousness of motherhood, the presence of mind when she faced delivery, expectation of the coming child, change of the feeling towads her child before and after birth, and the prospect of the future of the new-born child, and let them answer freely.

The findings are:

1) The number of mothers who wanted pregnancy reaches as a little over thrice large as that of the previous investigation, the percentage being 63%, showing higher degree of expectation. Child birth is planned; in the case of primiparae, they plan to have a child after they get accustomed to a marital life, and in the case of the multiparous, many mothers want to have a child at proper intervals controlling the child birth. The thought that "a child is made out" by a couple on a plan has grown powerful.

2) The rate of wishing to keep off conception is 30%, the same as that of last investigation, but the economical reason that was heading the list of the reasons for averting conception in the previous investigation has grown small in number because of the improvement in living conditions.

3) The number of the mother who takes good care of her fetus paying attention to her food and protecting her body during pregnancy has increased.

4) No change is seen in the previous and present investigations regarding "morning sickness," abnormal psychology and the presence of mind in facing delivery, rather, a great individual variation is seen.

5) Normal physical constitution and healthy body condition are expected of the coming child due to the influence of saridomide and other medicines. Regarding the nature of the child, such a tendency is seen that more importance is attached to environment and education than to heredity. Asking the mothers the prospect of the future of their children after they gave birth to, their minds seem to tend towards the soundness of mental development of their children from that of the physi-

cal development.

6) Even if a mother had no consciousness as motherhood during pregnancy, it is after she gave birth to a child and when she first gives breast to her child that she feels maternal affection and a great pleasure.

Through the previous and present investigations, no change is found in the process of the expectant women becoming conscious of motherhood, however, the modern people's intentional attitudes towards pregnancy are reflected in the upbringing of children, which fact is attended with danger that parents' plan comes first and child's ability and characteristics are disregarded.